

+ 3 【ばけがらす】

先生が教室でみんなにこういいました。

「みなさんもおそらくわかっているでしょうが、この世の中でいちばん偉いのは人間です。ではどうして人間は偉いのでしょうか。かんがえてみてください」

すかさず完ちゃんがこう口答えをしました。

「おかんがいった。動物も人間と同じじゃ。命もあるし、親は子を可愛がる」

「でも、言葉話すのは人間だけでしょう」

先生はむきになっていきました。

「犬猫だって、言葉話すんじゃ。人間が人間にしかわからない言葉話すのと同じで、犬猫は犬猫にしかわからない言葉話すんじゃ」

「でも、言葉書けるのは人間だけでしょう」

先生は赤い顔になっていきました。

「犬猫だって書けるさ。土をがりがりひっかいてるじゃろ。あれは犬猫の言葉を書いているんじゃ。それに先生よお、人間の赤ちゃんは、言葉話せないし書けんじゃろ。人間の年寄りも、病気になって言葉を話せなくなるし書けなくなる。人間のなかでも、赤ちゃんも年寄りだけは偉くない人間なんか」

「それは、それは、それぞれ、赤ちゃんは、偉い人間の若葉で、年寄りも、偉い人間の枯葉ということです」

先生は、完ちゃんの頭を殴るのを我慢しているふうでした。

「墓場かい」

「は、は、は、墓場ではなくて、若葉、枯葉」

先生の頭から湯気がでています。

「人間は偉いかのう」

「偉いんです」

「そうかのう」

「そです」

「そうかのう」

「そうです、だってば。動物は弱いものを殺します。犬は狐を、猫は鼠

を平気で殺します」

「弱いものを平気で殺すのは、人間がいちばん得意じゃろう」

「そ、そ、そ、それには深いわけが」

「犬猫にも浅いわけがあるんじゃない」

「深いわけはあっても、浅いわけなんかありません」

「そうかのう」

「そうです」

「そうかのう」

「そうです、だってば」

先生の「だってば」は危険のしるし。

完ちゃんが危ないとかんじたぼくは、助け舟をだしたつもりでこうい
いました。

「せんせいよお、わしは、このよのなかで、いちばんえらいのは、おば
けだとおもうがのう」

先生の血走った眼がこちらに向けられて、

「おぼけは、この世でなく、あの世でしょう」

「いんや。あの世にいたら、おぼけじゃない。この世にでてくるから、
おぼけじゃろうが」

「おぼけなんか幻想（げんそう）です幻覚（げんかく）です」

「げんに、そうかのう。げんに、かくじつかのう」

「そうです、だってば。人間が犬猫と同じとか、人間よりおぼけが偉い
なんてことをおもう人間は、人間ではありませんから、もう教室に入る
権利もないし、もう学校にくる義務もありません」

どうもぼくの助け舟は泥舟だったようで、完ちゃんとぼくは水の入っ
た桶を頭に乘せて、廊下に立たされました。

窓から外を見ると、まだ昼間なのに、巨大な鳥が飛んでいます。

「あれはなんじゃ」

ぼくがいうと

「あれが【ぼけがらす】じゃ。阿呆なやつを見ると飛んでくる。前に懐
爺がいつとったじゃろ」

完ちゃんは首をすくめました。

ぼくには記憶がありません。

「くわれるんか」

このかっこうでは逃げることもできないぼくはききました。

「いんや。みてみい。見てるだけじゃ。そんで、からかうだけじゃ。そのうち声をあげるで。動物も言葉を話すしょうこじゃ」

そのうち、大鴉は巨大な口をめいっぱいひろげて、ぼくたちを見たまま、叫び始めました。

あほあほ

あほったらあほ

あほれあほれほれ

あほったれ

あほあほ

あほいあほい

あほあほ

その巨声と高笑は、いつまでもいつまでも続き、全世界に轟くほどにもおもわれ、人喰いおばけに大口を開けられるよりも、よっぽどおそろしかったものです。